

- 1 派遣期日 令和5年11月17日(金)
- 2 派遣先 学校名 龍ヶ崎市立龍ヶ崎小学校
所在地 〒301-0000 茨城県龍ヶ崎市 3316
<https://www.city.ryugasaki.ibaraki.jp/ryugasakisyou/>

3 研修内容

(1) 龍ヶ崎小学校の教育

令和4・5年度茨城県金融広報委員会の委託を受け、龍ヶ崎小学校で金銭教育研究発表会が開催された。研究主題は、「ひと」「もの」「自分」を大切にし、よりよい生活を目指そうとする児童の育成である。金銭教育をものやお金を大切にするを通じて、お金や労働の価値を知り、感謝と自立の心を育てることによって人間形成の土台づくりを目指す幅広い教育ととらえ、研究し、実践が行われていた。龍ヶ崎市の目指す子供像は、「夢」をもち「生きる力」を自ら育む児童の育成である。「龍の子人づくり学習」は、市学校教育の中心であり、小中学校9年間を見通した創意工夫ある学校づくりの中で行われる。まさに「生きる力」を基盤とした、社会参画力の育成のための学習である。社会の変化に対応でき、思いやりと規範意識をもち、心豊かに生きることのできる「人づくり」を目指すためには「生きる力」を基盤として子供たちの社会参画力を育成していくことが必要となる。自分らしい生き方を見付けるための「ゆめ学習」と、よりよい社会を実現するための「みらい学習」を中心に、各教科、特別の教科道徳、ICT教育等を含めた学習が系統的に組み合わさって成り立っている。龍ヶ崎小の教育活動において、金銭教育と「龍の子人づくり学習」の双方が多く関連しており、児童にとってより有効な実践となる。

金銭教育の意識を高めるための実践例として、まず、全校での自問清掃に取り組んでいる。金銭教育を通して育てたい児童の姿として、「勤労の貴さを理解し、進んでみんなのために行動できる児童の育成」が挙げられる。清掃の時間を自問清掃として心静かに清掃活動に取り組んでいる。それにより、がまんできる自制心を培い、満足を先延ばしできる能力が高められる。日によってだまって掃除することが難しいと思う児童は自分で、掃除をせずだまって席についていることを選択することができる。

(2) 公開授業

①第2学年 道徳科

ものを大切にという主題で、学級のおとしものを提示したり、日用品やお金の大切さを具体的に考えさせたりしていた。終末の教師の説話においては、教師が使っているかばんにまつわるエピソードを話すことで、ものを大切にするということが一般化された。

②第4学年 総合的な学習の時間

サツマイモを育て、収穫したサツマイモでほしいもづくりを行い、販売まで行う計画で、販売に向けての計画立案を発表する授業だった。本時の最後に、ほしいもの生産者をゲストティーチャーとして迎え、話を聞くなど、綿密に準備された学習展開が行われた。

③第6学年 総合的な学習の時間

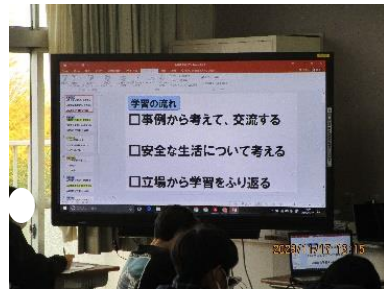
労働の意義とお金の価値について、事例をもとに課題を見つけ出し、どのような行動をとるべきか考える展開となっていた。指導計画では、今後他学年に向けて学習発表会を開くことになっており、学習したことを学校全体で共有する有意義な内容となっていた。



「2 学年道徳科 学習形態」



「4 学年総合 板書」



「6 学年総合 学習の流れ」

(3) 講演会

講演会では、ダニエル カール氏による「オラの日米おもしろお金講座」と題して、日本とアメリカの金銭教育の違いについて語られた。世界恐慌を経験した祖父、父の話や、自身の金銭感覚がどのように身に付いたかという話を、子供たちにもわかるように話されていた。アメリカでは、金銭教育が進んでいて、家庭でも親がお金について子供に教えるし、学校でも教えるそう。日本も家庭において、もっと金銭教育を行うべきだということ強く話されていた。お小遣い、お年玉として子供にお金を与えるのではなく、アメリカでは家事の手伝いをさせ、その対価としてお金を払うことが普通であるという。給料をもらう際にも、払われるべき額がきちんとあるか確認することの大切さや、税金などについても、きちんと親が話をするべきで、ローンについてやクレジットカードの使い方などを知っておけば、将来子供がトラブルに巻き込まれることはないと話していた。

(4) 研究の成果と課題

①成果

「各教科、領域において金銭教育を実践することで、授業者が学習課題や問題場面の設定を工夫するようになった」ということが報告された。それにより、児童が実生活においてお金を含めた「ひと・もの・自分」を大切にしたい意欲が高まったそうである。さらに、ものの使い方、選び方について考えることで、消費者としての行動意識を少しずつ身に付けることができたようである。変容を見るために、意識調査による肯定的回答の数値を挙げた。「困っている人がいたときに、助けてあげているか」肯定的回答 92%、「何かをしてもらったときに、ありがとうを言っているか」肯定的回答 96%、「持ち物に名前を書いているか」肯定的回答 92%。

②課題

自己肯定感をもった子供たちや、ものを捨てるときに「今まで使わせてくれてありがとう」と、ものに対して愛着をもったり、感謝したりできる子供たちをさらに増やしていくことが挙げられた。

4 感想

研究主題が「ひと」「もの」「自分」を大切にするという、わかりやすい主題であった。実践例の紹介から、学校全体で金銭教育に取り組んでいるということが伝わってきた。栄養教諭・養護教諭と連携した金銭教育や図書室に金銭教育に関する本を並べるなど、学校教育と金銭教育の強い結びつきが見られた。公開した授業の内容は、どの学校でも実践できる学習内容であった。普段の授業に、金銭教育のエッセンスを取り入れ、教師が意識して金銭教育を行うことで、どの授業でも実践可能であることを証明してくれた。金銭教育は、子供たちにとって一生続くものであることから、将来困らないように、長期にわたって実践していく必要がある。

ダニエル カール氏の講演では、もっとお金について家族でオープンにして話してほしいという願いがあった。子供が欲しいとねだるものを、ただ買い与えるのではなく、働いて稼いだお金で買うものだという意識を子供のうちからもたせるのが大切なのだと理解した。それに、お金を得る大変さを知るとことで、欲しいものに対する考えも変化し、本当に欲しいもの、必要なものにお金を使うようになるのではないだろうか。このような金銭感覚を養うのは、やはり、子供時代に親から教わる影響が大きいように思う。日本でも、家庭教育と学校教育が連携して、子供に金銭教育を行うことで、将来お金の問題で困らない子供を育てていきたいと思った。

本校は、令和 5・6 年度茨城県金融広報委員会の委託を受け、次年度、金銭教育研究発表会を開催する。視察した龍ヶ崎小学校をモデルにして、金銭教育を通して児童につけたい力を明確にし、現行のカリキュラムに金銭教育の視点を落とし込むことで、学校教育全体として金銭教育を展開できるように研究を進めていきたい。そして、お金や労働の価値を知り、感謝と自立の心を育てることによって人間形成の土台づくりを目指していきたい。